

SCP財団で職員をしてい
る

ゼノモフ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

SCP財団で職員をする男、浅村仁。

彼は果てしなくSCPに好かれ、またSCPを捻じ伏せる力を持つ。

彼の正体は…

目 次

S C P 1 7 3	S C P 1 0 6	S C P 6 8 2	S C P 9 9 9	D クラス職員とブライト博士	SCP 0 4 9	13	20 17	9 5 1
---------------	---------------	---------------	---------------	----------------	-------------	----	-------	-------

SCP-173

この世には、あらゆる怪奇が溢れている。

例えば、生きた石像。絵の中の女性。

これだけじゃない、たくさん、もつとたくさんだ。

しかし、これらを一般人の目に触れさせるわけにはいけない。ただの人間がこいつらの存在を知つてしまったら、気が狂つてしまう。それどころか放つておくだけで地球が滅亡しちまう奴だつてザラにいる。

だから、俺たちはそいつらを隠している。

**S
e
c
u
r
e
C
o
n
t
a
i
n
《
収容
》
P**

それを行う俺たちはSCP財団、それを行われたものたちはSCPと呼ばれる。さて、俺はSCP財団の職員だ。それも、かなり特殊な立場の。

「ジン・アサムラさん！ 173が脱走しました！」

「あ!? ヘマやらかしたのは何処の誰だ!?」

「Dクラス3人です！」

「そいつは三日間デザート抜きだ！ 俺は173の確保に行く！」

「Dクラス達はもう死んでます！」

「そうか！ じゃあ行つてくる！」

すまないな、話を打ち切つてしまつて。 だが、これから仕事だ。

そう、俺は逃げ出したSCPや非常に危険なSCPを確保するためここにいる。

SCP-173、彫刻—オリジナル。

人に見られているうちはただの彫刻だが、人の視界がなくなると途端に活動を始め、近くの人間の首を折つたり絞め殺したりする。

オブジェクトクラスはE結構_ユク_リヤ_バイd、下手したら死人が2桁に登る！

さて、報告に来た職員にミスをしたDクラス職員への処置を言い渡し、部屋を飛び出る。

ああ、Dクラス職員つてのは、このSCP財団で最も地位の低い職員で、死刑囚が一ヶ月だけDクラス職員になり、その後記憶消去を受ける。

「173！ 何処行きやがった！」

あいつは人の視界がなければ、途轍もないスピードで移動する。

瞬きでもアウト、瞬時に間合いを詰めて首をへし折る。

—ゴリゴリゴリゴリ…—

通路を走つていると、不意に石臼を引くような音が聞こえてきた。

間違いない、173の足音だ。

「いいぜ、来いよ。」

—ゴリゴリゴリ…—

石臼を引くような音が止まり、俺が瞬きをすると同時に目の前のドアが開く。目の前には一つの不気味な彫刻：SCP—173がいた。

そして、俺はもう一度瞬きをする。

本来こいつの前で一瞬でも視界を閉ざすのは自殺行為、だが俺は…
—ガンツ！—

瞬時に間合いを詰めて、首を折ろうとしてくる173の腕を止める。

『…あ、ジンくんじやん。』

「ジンくんじやん… じゃねえ！ また脱走しやがったのかこの問題児！ E u c l i
d 野郎！」

『いやあ、しようがないか。つい、ついへし折つちやうんだよ！』

「知るか！ お前のせいで残 k : D クラスがどんどん減つてくんだよ！

成がどんだけ面倒くさいのか知つてんのか！」

『ごめん、ごめんよ！ だから引きずるのはやめて！』

「…つたく。」

新職員の育

人の目があるところでは、こいつは身動きを取れない。

しそうがないから173を担ぎ上げて、閉じ込めていたコンテナまで運ぶ。

『…ねえねえ。』

「…んだよ。』

『今度コンテナに会いに来てくれない?』

「ああ、暇があればな。』

ほざく173をコンテナの中に投げ入れて、扉を閉めるボタンに手を添える。

「んじやな。』

『うん、それじやあまたね。』

173に別れを告げて、コンテナの扉を閉めた。

あ、申し遅れた。俺の名前は浅村仁、または… SCP-001だ。

SCP-106

「ふわあ…」

昨日、SCP-173の脱走を取り押さえた後、直ぐに寝た俺は翌日の6:00ぴつたりに起床した。

俺が寝ている時間に仕事がない限り、基本的には六時起きだ。

日によつては仕事が全く無く、仕事があるとしてもちよつと走り回るだけ。月によつては三日間仕事をすれば終わりだ。その上給料も良く頼めば頻度は少ないが休みもくれる。

なんというホワイト企業だろうか。

しかし、そんなホワイト企業でもきつい日は存在する。

「…あのジジイ…」

目の前には黒い穴が開いていた。

その穴の周りには腐食が見られる。間違いなく、SCP-106、オールドマンのポケットディメンションだ。

106は触った全ての物を腐食させる。そして達が悪いことに、簡単に脱走しては

職員をさらつたり俺に面会に来たりする。

だから最近は、俺の部屋に直接、あいつの能力であるポケットデイメンションを出すように言つている。

ポケットデイメンションつてのはわけのわからない不思議空間で、あいつがとらえた若い職員と遊ぶ：もちろんやばい意味の遊びをするために使う空間だ。

「…行かねえと脱走するよな、あいつ。」

意を決して、ポケットデイメンションの中に飛び降りる。

「ここは嫌いなんだよな。 体に負担はかかるないが、臭い。

しばらく灰色のレンガが作る細道を歩くと、上に出口が見つかった。

「よつ。」

その穴から這い上ると、目の前にはエグい色の肌をした爺さんがいた。

そう、こいつがSCP-106だ。

『おお、來てくれたか、ジンさん。』

「來てくれたか、つてもお前俺が來ねえと脱走騒ぎ起こすだろうが。 職員の研修の度にブライト博士がSシャーク Pパンチング Cセントラの説明始めたり、SCP-682と同じ濃度の塩酸の中に入れようしたり、SCP-920に案内させようとすんだよ。」

『そいつはブライト君に言つとくれや。』

「お前が新人を殺らなければ済む話なんだよ。俺がブライト博士に注意をしてないと思つたか？あの人の部屋一面に禁止リストのコピーを張つていないと思つたか？」

あ、今出てきた単語については今度教えてやろう。

とりあえずはこの腐れジジイとの話を終わらせなければ。

「んで、なんで俺呼ばれたの？」

『いやいや、大したことでもないんだけども… 最近、職員の連中が要望を通してくれないんだわ。』

「へえ… おい待てどうやつて要望出してんだ。」

『そりやあちよつとだけ顔出して頼むんだよ。』

『…この部屋から出んなよ？ んで、要望は？』

『若い男の人肉を…』

「ん。」

SCP-106の要望に、自分の左手を引っこ抜いて渡すことで答える。

「これでしばらくは大人しくするだろう。」

『おお！ これだこれ！ いやあ、毎度すまないねジンさん。』

「つたく、腕ぐらいまたやるから脱走は控えろよ？」

『おう、また今度頼むわ！』

腕から滴る血を嬉しそうに舐める爺さん。

あ、白衣が血で染まつちまつたな：

「んじや、俺は帰るわ。」

『助かつたぜ、ほれ、出口だ。』

「ん、あばよ。」

SCP-106の開けたポケットディメンションに飛び降りる。

暫く歩くと、先ほどと同じように出口が見つかった。

ジャンプをして這い上がらると：

目の前にはガラスで蓋をされた塩酸の風呂と、その風呂に浸かるトカゲがいた。

『お！ ジン！ 久しぶりじやねえか!!』

「あんの… クソジジイイイイ!!」

そのトカゲはSCP-682、俺が…めちゃくちゃ嫌いなSCPだ。

SCP-682

『よおジン〜、会いたかつたぜえ〜？』

ガラスの蓋を叩き割つて塩酸の中から出てきて、うざつたく絡んでくるSCP-682こと、不死身の爬虫類。

お前はトカゲだろうが！ 犬じやねえはずだ！

「ええい！ やめろ鬱陶しい！ つてか塩酸ついてるから溶けるんだよやめろ！ 白衣の着替え用意してねえんだよ！」

『いいじやねえかよジン〜、遊ぼうぜ〜？』

「だああ、もう！」

一層絡んでくる682の尾を掴み、塩酸風呂の中に落とす。

—ジャバアアアン！—

音とともに、塩酸が辺りに巻き散らかされる。

SCP-682が浮上する前に、収容室の扉が開いて武装した職員達が駆け込んでくる。

「…あれ、ジンさんじやないですか。 おーい、皆んな、撤収だ。 ジンさんなら大丈夫

だ。」

「おう、任せとけよマック。」

武装した職員： マックは拍子抜けといった表情をした後に周りの職員を率いて扉から出て行つた。

その際に周りの職員も「なんだよジンさんか？」だの「絶対手懐けるマン」だの言ひながら帰つていく。

さてかあいつら、SCP—682の迎撃とかほぼ死に確なんだが。
『ジン、なんで左手がねえんだあ？』

「今更？ 今更かこの野郎？ さつき106に差し出したんだよ！ そんで帰ろうと思つたらポケットディメンションでここに送り込まれたんだ！」

『おお、爺さんナイスだなあ、ジン、礼言つといてくれえ。』
「意地でも断る！」

這い出してくる682の頭を引っ叩き、左手を生やす。

『でもよお、ジンさん。俺はわかつてんだぜえ？』

「ああ？ 何がだよ。」

『あんたあ、喜んでるだろお？ 嬉しいんだろうお？ 俺たちに必要とされんのがよお。』

「チツ！ んなわけが…」

『知つてんだぜえ～？ あんたがここに来る以前どんな奴だつたかあ～。』
「ツ！」

挑発するように言つた682を蹴り飛ばす。

『あんたあ、相変わらず精神は弱えなあ～。まあ、そんなところも含めて大好きだぜえ～？ 愛してるぜえ～？』

「…うるせえよクソトカゲ。」

『誰にも必要とされなかつたあんたがあ、ここじやあ最高に人気者だあ～。嬉しいだろお？ 楽しいだろお？』

「…へいへい、そうだな682。」

這いすつて来る682の頭を抱き寄せる。

「いいか？ お前が何を持つてそれを知つたのかは追求しない。でもな、それを必要以上に言いふらすんなら：俺にはお前を破壊することができるぞ？」

『あんたに殺されるならあ、本望だあ～。にしても、抱きしめるなんて嬉しいなあ～。ふざけたことを抜かす682の頭を強く締める。ミシミシという音が俺の耳にも聞こえてきた。

『ああ～、ストップう～！ よしてくれえ～！』

途中で力を緩め、682を地面に置いたところでマックがまた入ってきた。

「あ、ジンさん。 そこの塩酸プール直るまでの間そのクソトカゲ預かつといてくれませんか？」

それは……俺にとつては地獄の宣言だつた……
『やつたぜえ！。 ジンさんと一緒にああ。』

うるせえだまれ！

SCP-999とSCP-682

『ジンく、おはよう。 つてかなんでこのリード切ねえの〜?』

自室で目覚めた俺の耳に、悪夢が飛び込んでくる。

SCP-682、収容室の修理が終わるまでの間俺が預かることになつたクソトカゲだ。

その682の首には、黒いリードが巻かれている。

「そりやあそудだ。 俺の髪を編み込んで使つたからな。」

『なあるほどおく、そりやあ切ねえわけだ〜。』

682はそのリードを弄りながら床をゴロゴロと転がつた。

あ、馬鹿野郎絡まるだらうが馬鹿。

『絡まつたあ〜。』

案の定絡まつたリードを解き始める。

『ジンく、今日は何するんだあ〜?』

「ああ、SCP-999がお前に会いたがつていてな。

丁度いいから要望を通してやろうと思つたんだ。」

『嘘だろお!? ジン〜! 僕があいつ嫌いなの知つてんだろお?』

「おう、それが何か問題か?」

『ジン〜!!』

滅多に聞くことのできない、爬虫類の悲鳴が廊下にこだました。

◇◆?◇

『あつ! やめつ! あひやひやつ!? やめろクソスライムウ〜!』

『ジンちゃんありがとう! 682ちゃんと遊びたかつたんです!』

目の前にいるオレンジのスライムはSCP-999。

以前俺が実地した【SCP財団内人気SCP投票】において余裕の一位を勝ち取った超人気SCPだ。

ちなみに682は一票だけ票を得ている。ちなみに投票者はブライト博士。

「おう、周りの職員は避難してるから存分に遊べ。あ、だが気絶はさせるなよ?」

『やつたあ!』

『ジン〜!!』

前回の実験の際には酷い結果になつたので、前日にしておいた俺の申請は通らないかもしれないと思つたが、周りの職員を避難させることを条件として簡単に実現した。

しかしオレンジのゼル状の生物に体をくすぐられる巨大トカゲつてのも… シュード

ルだ。

転げ回る682と楽しむ999を見ていると、俺の心も癒される。で。

『ああ、やめてくれえ！ あひやつ！』

「ふう、くすぐりは満足しました！」

くすぐりは、それはまだこの遊びが終わらないことを意味している。

♠ ? ♠

「ああ死んじまううう。」

— そ
う
か、
死
ね。
—

ひでえ

俺たちは999との遊びを終え、俺も少し遊んだ後に682のリードを引いて部屋に戻っていた。

いや、やっぱり999は最高だな。

ちなみに、あいつが人の頭にくついた時にはその人が一番好きな味がするらしい。俺の時は自分の部屋の匂いがした。

「なあ、お前つて999の匂いはどんなのになるんだ?」

『うん? そりやあジンの匂いに決まってんだろうか?』

「そうか。」

喉を鳴らしながら足にすりよつてくる682を無視して、人気のない廊下を進んだ。

Dクラス職員とブライト博士

さて、今日は特別な日だ。なぜかわかるか？

今日は新しい職員（記憶処理を施されたDクラス）が補充される日だ。

Dクラス職員は死刑囚から選考され、一ヶ月間ここで働かされる。

ちなみに減刑されると言われているが、そんなことはない。というよりも記憶処理をしているのでここで勤務していた記憶は一切なくなる。

目の前にいるのは部屋に通されて、パイプ椅子に座つた60人の死刑囚。突然これだけではSCPを管理するのには足りない。

何箇所かに分けて研修を受けさせてるので、本当はこの十倍以上の数がいる。

「さて、就任おめでとうクズ野郎ども、君たちにはこれから一ヶ月間、ここSCP財団で働いてもらう。ご存知の通り、一ヶ月間きちんと働けば減刑するし、その一ヶ月間の中で特に素晴らしい才能を見せたものはここのSCP財団で雇用して、罪を無かつたものにして働くことができる。」

俺の発言を受けて、部屋の中がガヤガヤと騒がしくなる。

そして、その内一人、黒人のスキンヘッドの、ガタイのいい男が立ち上がる。

「今、お前をぶつ倒して逃げりやあ仕事なんぞしなくても良いんじやないか?」

「…確かに、お前はジエイクだつたか? 止めておけ、職員にはお前たちを射殺する許可が當時出ている。それに:何故俺がお前らに手錠を付けなかつたと思う?」

「知るか、よつ!!」

ジエイクはパイプ椅子を畳んで、武器にして殴りかかつてくる。

特に何の感動もなく、パイプ椅子を頭に受ける。

「へつへつへ…え?」

ジエイクが目を見張つた。そりやあそうだ。俺の頭をぶん殴つたはずのパイプ椅子が大きく凹んでいるのだから。

「さて、理解したか? 俺は特別優しいから一回は許してやる。 次からは命の危険を

…

そこまで言つたところで、ガタンと音を立てて扉が開く。

その先にいたのは…赤いネットレスをかけた猿だ。

「やあ諸君! 私がブライト博士だ!」

「帰れマツドサイエンティスト! 新人研修には絶対乱入すんなつつつただろうが!!」

叫んでブライト博士を叩き返す。

しかし猿は諦めずに扉から顔を出して、新人に向けて口を開く。

「オーケー、諸君。椅子にケツを沈め、汚い口を閉じろ。俺にはこのあと行くところがあつてだな、おまえらより重要な人物に会わん：」

「ここは S シャーク・パンチング・センター P C じやなくて SCP 財団だつづてんだろうが！」

今度こそ猿を叩き出して、扉を閉める。

「あー、取り乱してすまない。 では、研修を続けよう。」

☆★☆

「というわけだ。 諸君は命の危険を感じる仕事をすることもあるが、できる範囲で俺が助ける。 では、解散だ。 諸君の部屋には俺が案内しよう。 部屋に着いたらまずゆっくりと休め、10時間越えの護送を受けたやつもいるだろ？」

最後に、新人たちをそれぞれの部屋に送つて、新人研修は終了だ。
さて、新しい職員を迎えて、新しい月を迎えた。
今日から April だ。

SCP-049

どうもこんにちは、ジンだ。

今は682を引き取つて暫くして、修理が完了したので682を塩酸プールにぶち込んで帰る途中だ。

あ、ちなみに俺の仕事はSCPの取り押さえと、一部のSCPと月一で会うこと。

SCPの中でも高度な頭脳を持つ奴らは狭い場所に閉じ込められてうんざりしてるだろうからな。ストレスで暴れ出さないようにたまに面会をすることになつていてる。

今日の面会はSCP-049、ペスト医師だ。

049はペストマスクから人間と同じような目だけを露出させ、他の体の全てを黒いローブで覆つたSCPだ。

049には全ての人間がペスト患者に見えるようで、手術と称して健常な人間を改造成、ゾンビにしてしまう。

まあ、俺は049はあまり嫌いではないが。

「邪魔するぞ。」

『…ん、ああ。 ジンじゃないか。』

独房の中に入った俺を迎えたのは、鉄の首輪を二本の柱に固定された049だつた。
その状態でも特に答えた様子はなく、こちらを見て右手を上げて挨拶をしてくる。
取り敢えず預かつた鍵で首輪を外す。

『悪いな。』

「気にすんなや、んで、先生。 調子は？」

『よくも悪くもないね。 ジンの方は？』

「少なくともペストは患つてねえな。」

『そうかい、それは結構。 …しかし、相変わらず不健康的だな。 隅はいつ見ても取れ

ないし、煙草も止めていないだろう？』

『いくら不健康でも、体調は崩さねえよ。 お前らがそれを望まねえ限りな。』

『そうちだつた。 君はそんな存在だつたな。』

立ち上がつた049は身長が190センチ以上あるので、さすがに威圧感がある。
俺も185センチと日本人にしては高い方だが。

『そんで、何か要求はあるか？』

『特に、かな。 君が月一で来てくれるならそれで十分だ。』

『そうか、そいつは重畳。』

他のSCPよりかは格段に理性的で、話を理解してくれるので049との会話は楽し

い。

999程ではないが、こいつも好きなSCPの1人だ。

「まだ、周りはペスト患者に見えるか？」

『見える、じゃない。彼らは悪疫を患っているのだよ。ジンは違うようだが。』

「そうかい。」

ただ一点、周りの人間を全員ペスト患者と考えて、おかしな手術をしだすところは嫌いだが。

「んじやあそろそろ時間だな、また会いに来るぞ。」

『もうか、残念だな…まあ、待つているよ。』

小さく手を振る049に鉄の首輪を掛け、柱に固定し直す。

「あばよ。」

部屋から出て、独房の扉を閉めて自室に向かう。

さて、明日から日本に出張だな…■■県の旧■■村か。